シュタウフェン朝時代の宮廷詩人語について

須　沢　　通

1

中世盛期に統一的文学語を目指した宮廷詩人語（höfische Dichtersprache）について，その存否をめぐる議論の口火を切ったのは J. Grimm である。彼は 12-13 世紀，ライン川及びドナウ川沿岸地方，南はチロールから北はヘッセンまでの広い地域に、全詩人が用いた一つの共通語的言語が存在したと説いた[1]。さらに K. Lachmann はこれを一歩進めて，中世ドイツの詩人達が用いた言語を，細部に若干の方言的性格を含むものの，全体として普遍的な統一的言語とみなした[2]。このテーゼから K. Lachmann は中高ドイツ語（Mhd.）の文学作品の写本を，規格化され，標準化された Mhd. で校訂している。これに対して H. Paul は統一的文学語としての Mhd. の存在を否定し，詩人達はただ彼らの方言によってのみ詩作したと主張した[3]。このように極端に対立する学説をめぐり長いこと種々様々な議論が展開されたが，今日までの研究で，新高ドイツ語（Nhd.）の文章語（Schriftsprache）と対応する意味の Mhd. の文章語もしくは共通語（Gemeinsprache）は存在しなかったとする W. Henzen の説[4]が現在の標準的テーゼとなっている。A. Bach によれば，騎士層の超地域的な交流により，また宮廷社会の洗練された形式意志のため方言の超越を目指した騎士階級の特殊語（Sondersprache）は，騎士層に基盤を置いた文学に詩人語として影響を及ぼしたばかりでなく，日常の言語生活にも一定の影響を及ぼした。しかし A. Bach は，この言語規範は宮廷文学においてすら細部にわたって規則だてられた一つの統一体とはなりえなかったとし，ただ統一への一傾向を認めている。そしてこれと並んで方言的なものも常に一定の役割を果してきたと強調する[5]。同様に H. Moser も宮廷詩人語を意図的に試みられた超地域的な文学的共通語とし，Hartmann von Aue, Wolfram von Eschenbach, Gottfried von Straßburg, Walther von der Vogelweide 以来，宮廷詩人達は方言を越えた言語を目指して努力したとしている。彼においてもまた，この詩人語は決して統一的なものではなく，特定の身分に限定された特殊語であり，決して語形や語法の細部にわたって規制されたものではなかった[6]。P. v. Polenz はシュタウフェン朝時代の宮廷詩人語の中に古典的中高ドイツ語（klassisches Mhd.）は存在しなかったとし，せいぜい共通語的傾向への萌芽があったとしている。また彼は宮廷詩人のドイツ語がただ単に純粋な地域的均一化への傾向を示しただけでなく，「高められた言語」という意味での標準語（Hochsprache）への過程にあったことも認めている[7]。しかし，シュタウフェン朝の崩壊，そして騎士文学の衰退とともに共通語への傾向の芽はしぼみ，標準語への道も鎖され，結局この宮廷詩人語から統一された文章語が生まれることはなかった。一方 F. Tschirch は Mhd. の詩人語を超地域的な人造語（Kunstsprache）であるとし，これは明らかに方言的と思われる言語の使用を入念かつ徹底的に回避したシュタウフェン朝古典期における詩人達の大きな苦労の所産であるとした。

すなわち詩人語の言語表現における共通性は「否定的選別」(negative Auslese) によって成立したものであり，ここに各地域の言語の統合から造られた Nhd. の文章語との根本的相違があると結論する[8]。さらに N. R. Wolf によると，宮廷詩人語は（これが1200年頃唯一確認されうるものではあるが）いくつか存在すると思われる機能語 (Funktiolekt)＝ある状況（立場）に特徴づけられたコミュニケーション機能を有する語法＝の一つにすぎない。これが特定の社会層においてただ単に文学的コミュニケーションの手段として使用されたのであるが，彼はこの宮廷詩人語が騎士層内部でコミュニケーションの手段として，つまり内部に向けては相互の意志疎通と同一集団の構成員たることの相互確認の手段として，外部に対してはこれと一線を画するための手段として用いられたのではなかったことから，これを社会集団語 (Soziolekt)＝ある社会集団（層）に特有な語法＝とは認めなかった。N. R. Wolf はさらにこの詩人語の言語規範について，これがどこにおいても明確に示されてはいないものの，詩人間のコンセンサスをうかがわせる数多くの点からこれを推測することができるとしている[9]。

2

宮廷詩人語が方言を超越した超地域的言語を目指したことを示す根拠として，A. Bach[10]，P. v. Polenz[11] は各詩人が同一の押韻を目指したこと，すなわちどの地方の音で読んでも韻が不純にならないような押韻語を用いたことをあげ，gân/gên, stân/stên, kam・kâmen/kom・kômen の地方によって明確に異なる語形をもつ動詞は押韻語として敬遠されたとしている。つまり komen の過去形はアレマン方言では kam・kâmen であるのに対し，バイエルン方言では kom・kômen となり，もしアレマンの詩人が kam-nam の押韻を使えば，バイエルン方言では kom-nam となって不純な韻を生み出すというのである。同様にアレマン方言 gân, stân はバイエルン方言では gên, stên となり，アレマンの詩人が用いた gân-hân の韻はバイエルン方言で gên-hân の不純な韻を生み出すことになる。しかし A. Bach は，アレマン方言の gân 韻及び stân 韻に関しては後にバイエルンの詩人によっても用いられ，逆にバイエルン方言の gên 韻，stên 韻も後になってアレマンの詩人に用いられ，これによって両方言圏での一種の交換が行なわれたとしている[12]。これに対して N. R. Wolf は，宮廷詩人語におけるアレマン方言の優位性を説き，バイエルンの詩人がすでに早い時期に自分達の方言とともにアレマン方言の gân, stân をも用いていたとする[13]。本稿では Mhd. の代表的詩人達，すなわちアレマン語地域の二人の詩人，シュヴァーベン出身のハルトマン・フォン・アウエとエルザスのシュトラースブルク出身のゴットフリート・フォン・シュトラースブルク，それにバイエルン語地域のヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ，そしてバイエルン・東部フランケン語地域のヴォルフラム・フォン・エッシェンバハにおいて，彼らが，gân/gên, stân/stên, kam・kâmen/kom・kômen，さらに gân の過去形 gienc とこれの新語形 gie も加えて，これらの押韻に対しどのような態度をとったのか，そこに宮廷詩人語としての一定の共通性がうかがえるのか考察してみる。

3

各詩人におけるそれぞれの押韻の用例数は，以下の表のようになる。ここで例えば gân 韻には，当然のことながら，enhât-zegât, missegât-verlât のような語形も含まれるし，kam 韻にはnæmen-bekæmen のような接続法過去形も含まれる。さらに gân-stân, gên-stên 韻は，それぞれ対立する他の方言に移しかえても押韻上不都合のない型であることから，これを gân/gên, stân/stên の押韻とは別の，独立した項として扱った。また gienc/gie について H. Moser は，直接法1・3人称単数過去形 gienc は中部ドイツ方言で一般的に用いられたのに対して，新語形 gie は上部ドイツにおいて多く用いられたと説明している[14]。なお各表における（ ）の中の数字は，その項の用例数のうち接続法現在形の用例数を指し，各項の右の点線欄に記された数字は，行数1000あたりの頻度を調べたものである[15]。

1．ハルトマン・フォン・アウエ

ハルトマンの四作品，Erec[16], Gregorius[17], Der arme Heinrich[18], Iwein[19] の配列は成立年代順である。Iwein は製作年代の違いにより1000行までの（I）と，1001行目からの(II)に分けた[20]。

	Erec (10191行)		Iw. (I) (1000行)		Greg. (4006行)		A. H. (1544行)		Iw. (II) (7166行)	
gân	34	3.34	5	5.00	16	3.99	6	3.89	23	3.21
stân	67	6.57	3	3.00	21	5.24	7	4.53	45	6.28
gân-stân	13	1.28	2	2.00	3	0.75	3	1.94	7	0.98
gên	4(4)	0.39	0	0	2(2)	0.50	1(1)	0.65	2(2)	0.28
stên	2(2)	0.20	1(1)	1.00	3(2)	0.75	1(1)	0.65	8(6)	1.12
gên-stên	1(1)	0.10	0	0	1(1)	0.25	0	0	1(1)	0.14
kam	85	8.34	6	6.00	21	5.24	1	0.65	1	0.14
gienc	1	0.10	4	4.00	0	0	1	0.65	12	1.67
gie	57	5.59	0	0	19	4.74	2	1.30	9	1.26

表の結果から，ハルトマンの押韻に対する態度について次の点が明らかになる。

1） ハルトマンはアレマン方言の gân, stân 韻を積極的に用い，gên, stên 韻に関してはこれを接続法現在の単数形として用いている。ただし stên 韻については，Gregorius で1例[21]，Iwein(II) で2例[22]の計3例において，これを直接法の一人称単数形として用いる。

2） kam 韻の使用に関しては，初期の作品と後期の作品の間に顕著な相違がみられる。つまりハルトマンはアレマン方言の kam 韻を Erec では多用したものの，次第にこの押韻使用を減らしていき，最後の Iwein(II) では意図的にこの押韻を避けている[23]。

3） ハルトマンは初期の Erec, Gregorius ではもっぱら gie 韻を使用しているのに対し，Iwein では gienc 韻を積極的に用いるようになる。つまりErec, Gregorius では，脚

韻をふむ対の語が hie, nie ばかりでなく，enphie, gevie のような同時に enphienc, gevienc の語形を併せ持つものとも gie 韻が使用されているのに対して，Iwein では，gie 韻は対の語が hie, ie, verlie の gienc とは韻をふむことが不可能なものに限られている。ここで Iwein(I) が gienc 韻しか持ちあわせていないのは，対の韻がいずれも gevienc, enpfienc の gienc, gie 両形に対応する語であることから，後に Iwein(II) との関係で，gie 韻が gienc 韻に書き換えられたとも考えられる。

ハルトマンが宮廷の mâze（中庸）の模範を文体や形式において与えたこと，彼の創作技術がつねに発展し，Iwein において完成することは今日までの研究で明らかであるが[24]，上記の押韻使用においてみてもそれが示されている。ハルトマンは特に Iwein において方言的色彩の強い押韻を避け，また異なった方言の押韻語との調和をはかり，洗練された言語形式の完成を目指したといえよう。

2　ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク

彼の作品 Tristan[25]（19554 行）における押韻の用例数は次の表のようになる。

gân	113	5.78	gên-stên	10(9)	0.51
stân	65	3.32	kam	153	7.82
gân-stân	32	1.64	gienc	5	0.26
gên	10(10)	0.51	gie	72	3.68
stên	14(14)	0.72			

表の結果から，ゴットフリートの押韻に対する態度について次の点が明らかになる。

1）　アレマン方言の gân, stân 韻はハルトマン同様ゴットフリートにおいても積極的に用いられ，gên, stên 韻はもっぱらこれが接続法現在の単数形として用いられた場合にみられる[26]。

2）　アレマン方言 kam 韻使用に関してもゴットフリートはこれに何の抵抗も感じず，この押韻を積極的に利用している。ここにハルトマンが押韻使用でとった態度と大きな違いがみられる。

3）　ゴットフリートは gie 韻を多用し，gienc 韻はわずか 5 例用いられたにすぎない。

きめ細かく彫琢され，最高の音調を持ち，見事に均斉のとれた言語と心を奪われるような清澄明晰な文体，そして格調高く，平明で，規則正しい韻律，この卓越した言語芸術によってゴットフリートはドイツの生んだ最大の詩人の一人とされている[27]。しかし彼は押韻においてはアレマン方言を積極的に用い，ハルトマンが示した超地域的，あるいは調和的傾向はそこにはみられない。このことは一つにはゴットフリートが押韻語の方言性を彼の言語芸術の障害とみなさなかったこと，あるいはこれらアレマン方言の語形の優位性を認めていたことを示す。また一つには彼が従士（Ministeriale）であるハルトマンやヴォルフラムと違い生活環境の高い市民階級の詩人[28]で，おそらくは故郷シュトラースブルクで余裕ある生活をしながら詩作に従事したと考えられることから，後述のヴァルターやヴォルフラムの遍歴詩人のように他の方言やそれを話す聴衆を余り意識する必要がなかったことを示す。

3　ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ

ヴァルターの叙情詩に関しては，それぞれの詩の成立時期，それによる詩の配列は確かでなく，テキストによってその配列もかなり異なっている。ここでは基本的校本としての H. Kuhn[29]をテキストにしたが，行数に関しては，いくつかの欠落部があり，またテキストに記された行数と実際の行数が必ずしも一致せず，明確な行数を知ることは不可能である。押韻形式は，aabb と二行ずつ脚韻をふむ叙事詩と異なって多少複雑で，abab cddc, baba ccd 等で表わすことができる。また Waise とよばれる他の語と韻をふまずに一つだけぽつんとあるものもある。以下は各種の韻をふむ用例数である。

gân	22	gên-stên	7(3)
stân	27	kam/kom	0
gân-stân	9	gienc	0
gên	9 (9)	gie	4
stên	15 (15)		

表の結果から，ヴァルターの押韻に対する態度について次の点が明らかになる。

1）　バイエルン方言の詩人ヴァルターはアレマン方言の gân, stân 韻を使用し，gên, stên 韻の使用に関しては上記二人のアレマン方言の詩人と同様，これが接続法現在の単数形として用いられた場合に限っている。ただし gên-stên 韻は，アレマン方言で用いられても gân-stân と押韻の純粋さが守られるため，数多くはないものの，直接法の形もみられる。

2）　kam/kom 韻は意図的に避けられている。

3）　gie 韻もできるだけ避けられてはいるものの4例だけみられる。このいずれも対の語は hie, ie, knie のように gienc とは韻をふむことが不可能なものであり，またすべてが H. Kuhn のテキストでは19の歌第32節までと最初の配列の詩に現われている。

以下みたように，ヴァルターは自分の故郷であるオーストリアの方言による押韻を明確に避ける態度をとっている。彼は最初ウィーンの宮廷に仕えたもののそれも長くなく，活動期のほとんどを遍歴歌人として過ごした。シュヴァーベンのシュタウフェン家を皮切りに，テューリンゲン方伯，マイセン辺境伯の居城を訪ね，ラインフランケン伯爵家に滞在するなどし，最後にホーエンシュタウフェン家のフリードリヒ二世に仕え，彼によってヴュルツブルクに土地を与えられることにより長い遍歴の旅を終えている[30]。ヴァルターの押韻使用もこのような詩人の生活をそのまま表わしている。彼は方言性を抑えながらも gân, stân 韻でも示されるように，ホーエンシュタウフェン家，すなわちシュヴァーベンのアレマン方言をより強く意識した押韻を用いている。

4　ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ

ヴォルフラムの言語に関して以前はテューリンゲン方言とかバイエルン方言とかみなされてきたが，今日ではバイエルン方言の特徴を有したフランケン方言とする E. Hartl の説が有力である[31]。フランケン方言とはこの場合東部フランケン方言を指すものと思われるが，

彼の方言に関しては多くの点で依然未解決の問題が多いとされる[32]。彼の二つの作品 Parzival[33]と Willehalm[34]における押韻の用例数は次の表のようになる。

	Parzival(24812行)		Willehalm(13986行)	
gân	3	0.12	0	0
stân	2	0.08	0	0
gân-stân	0	0	0	0
gên	3 (3)	0.12	2 (1)	0.14
stên	7 (4)	0.28	7 (6)	0.50
gên-stên	84 (3)	3.39	25 (2)	1.79
quam	4	0.16	0	0
gienc	79	3.18	29	2.07
gie	0	0	0	0

表の結果から，ヴォルフラムの押韻に対する態度について次の点が明らかになる。

1） ヴォルフラムはgân/gên，stân/stên 韻を意図的に避けようとしている。ただしアレマン方言に置き換えても押韻の乱れを引き起こさない gên-stên 韻に関しては，むしろこれを積極的に用いている。

2） quam・quâmen は東部フランケンを含むフランケン語域，及び東中部ドイツ語域等で用いられた[35]。Parzival にわずか4例みられる quam 韻は，ヴォルフラムがこの押韻を避けようとしたことと併せて，詩人の言語がこれらの地域の方言的特徴を有していることをも示す[36]。

3） もっぱら gienc 韻が用いられ，gie 韻の用例は全くみられない。

ヴォルフラムはアンスバッハ南東の中部フランケン地方の町エッシェンバハで生まれ，資産のない下級従士（Ministeriale）の常として主君の恩寵を求め遍歴の旅をしている。彼はヴュルツブルクの西，マイン河畔のヴェルトハイム伯のもとで過ごし，さらにここより南西のヴィルデンベルク城に立ち寄り，しばしばテューリンゲン方伯の居城を訪ね，最後にはヴェルトハイム伯の従士としてエッシェンバハに定住したものと思われる。また彼はオーストリア南東部のシュタイアーマルクトにも滞在したとされている[37]。このようにヴォルフラムの活動範囲は東部フランケン方言地域，これとラインフランケン方言にまたがる地域，それにテューリンゲンの東中部ドイツ語地域であり，バイエルン方言の地域とも関係が深かった。彼の押韻使用に関しても，これらの地方の方言色を残しながら，彼の活動範囲のより広い地域で受け入れられるべく努力の跡もうかがえる。

4

以上，四人の詩人の各押韻に対する態度を，それぞれの用例の統計結果からみてきた。この結果を比較，検討することによって，これら Mhd. の詩人達における各押韻の特徴を次のようにまとめることができる。

1） gân/gên, stân/stên は，gân, stân がアレマン，ラインフランケン，中部フランケン等の主として西部ドイツ方言で，また gên, stên がバイエルン，東部フランケン，東中部ドイツの主として東部ドイツ方言でみられるドイツ語圏を東西に二分する語形である[38]。しかしアレマン語地域の二人の詩人はもちろん，バイエルン語地域のヴァルターも gân, stân 韻を用いていること，またバイエルン・東部フランケン語地域のヴォルフラムも gân/gên, stân/stên の両押韻をできる限り避け，アレマン方言に置き換えても押韻の乱れを生じさせない gên-stên 韻を使用していることから，詩人達の言語におけるアレマン方言 gân, stân 韻のバイエルン方言 gên, stên 韻に対する優位性をみることができる。これに対して gân/gên, stân/stên の接続法現在単数形は gê, stê が統一した形として用いられ，さらに数例ではあるがハルトマンでは stân の直接法・一人称現在単数形として stên, stê の形がみられることから，相互の形を導入しあう妥協的傾向もうかがえる[39]。

2） kam・kâmen/kom・kômen，さらに quam・quâmen の語形は，kam・kâmen がアレマン，kom・kômen がバイエルン，一部東部フランケン，quam・quâmen が東部フランケンを含むフランケン全域と中部ドイツ，低地ドイツの広大な範囲で用いられ，それぞれかなり方言色の強いものであった[40]。このうちアレマン方言の kam 韻を積極的に使用したゴットフリートを除き，他の三人の詩人達においては，これら方言色の強い語は押韻語として意図的に敬遠された。

3） gienc/gie の語形は，gienc が中部ドイツで，gie が上部ドイツで用いられた[41]。gie 韻に関しては，上部ドイツの三人の詩人のうちハルトマンが後期の作品でこの押韻を抑え，むしろ gienc 韻を用いる傾向を示し，ヴァルターがこの gie 韻を避けようとする姿勢をとったのに対し，ゴットフリートはこれを積極的に用いた。また gienc 韻も中部ドイツ語圏のヴォルフラムによって積極的に用いられた。このように gienc/gie 韻に対しては，各詩人それぞれ異なった態度を示している。

以上，詩人の押韻に対する態度は各押韻語において異なり，また各押韻語に対する態度も詩人によって異なることがわかった。同時にまたそれぞれの押韻使用において，各詩人の間に一定の共通性が存在することも明らかになった。これらの点からわれわれは，詩人の押韻に対する態度が詩人の置かれた境遇，あるいは彼の言語芸術観に深く関係していることを理解するとともに，それぞれの押韻使用において，特定の詩人の間に，これが意識的もしくは閾下のコンセンサスにもとづくものか否かはわからないとしても，一定の妥協と調和をみてとることができる。以上の考察の結果，われわれはいわゆる宮廷詩人語について，これが文学的共通語（H. Moser）[42]，否定的選別により成立した人造語（F, Tschirch）[43]，もしくは機能語（N. R. Wolf）[44] として存在していたのではなく，ただ単にそれへの傾向を示していたにすぎないことを指摘することができよう。

註

1） Jacob Grimm : Deutsche Grammatik I. (Reprografischer Nachdruck der 2. Ausgabe, Berlin 1870), herausgegeben von W. Scherer, Hildesheim 1967, S. XII.

2） Karl Lachmann : Vorrede zu "Auswahl aus den hochdeutschen Dichtern des 13. Jahrhun-

derts", Berlin 1820, wieder abgedruckt in K. Lachmann : Kleinere Schriften zur deutschen Philologie, Berlin 1876, S. 161. (Vgl. die Darstellung in der "Geschichte der deutschen Sprache", Bd. 1, von Norbert Richard Wolf, Heidelberg 1981, S. 179.)

3) Hermann Paul : Gab es eine mittelhochdeutsche Schriftsprache? 2. Abdruck, Halle 1873, S. 37. (Vgl. die Darstellung bei N.R. Wolf, S. 179.)

4) Walter Henzen : Schriftsprache und Mundarten, 2. Aufl., Bern 1954, S. 54.

5) Adolf Bach : Geschichte der deutschen Sprache, 8. Aufl., Heidelberg 1965, S. 206f.

6) Hugo Moser : Deutsche Sprachgeschichte, 5. Aufl., Tübingen 1965, S. 124f.

7) Peter von Polenz : Geschichte der deutschen Sprache, 9. Aufl., Berlin-New York 1978, S. 57f.

8) Fritz Tschirch : Geschichte der deutschen Sprache, 2. Teil, 2. Aufl., Berlin 1975, S. 87.

9) N.R. Wolf : a.a.O.

10) Adolf Bach : a.a.O., S. 210.

11) Peter von Polenz : a.a.O., S. 56.

12) Adolf Bach : a.a.O.

13) N.R. Wolf : a.a.O., S. 180.

14) Paul, Moser, Schröbler : Mittelhochdeutsche Grammatik, Tübingen 1969, S. 214.

15) この方法は，ハルトマンの押韻の用例数とその頻度を調べるため古賀氏が用いた方法を採用した。古賀允洋：「中高ドイツ語の Dichtersprache について」熊本大学文学部論叢第3号（昭和56年2月）参照。

16) Hartmann von Aue : Erec. Hrsg. von A. Leitzmann, 5. Aufl. besorgt von L. Wolff, Tübingen 1972.

17) Hartmann von Aue : Gregorius. Hrsg. von H. Paul, 12. Aufl. besorgt von L. Wolff, Tübingen 1973.

18) Hartmann von Aue : Der arme Heinrich. Hrsg. von H. Paul, 14. Aufl. besorgt von L. Wolff, Tübingen 1972.

19) Hartmann von Aue : Iwein. Hrsg. von G.F. Benecke u.K. Lachmann, 7. Aufl. neu bearbeitet von L. Wolff, Berlin 1968.

20) Peter Wapnewski : Hartmann von Aue, 4. Aufl., Stuttgart 1969, S. 17.

21) Vgl. Gregorius 1416.

22) Vgl. Iwein 2112, 4184.

23) Vgl. Adolf Bach : a.a.O. und Peter von Polenz : a.a.O.

24) Peter Wapnewski : a.a.O., S. 6. u.S. 16.

25) Gottfried von Straßburg : Tristan. Hrsg. von P. Ganz, Wiesbaden 1978.

26) 1例だけ現在分詞 gênde-stênde の型がみられる。Vgl. Tristan 12991-2.

27) Gottfried Weber, Werner Hoffmann : Gottfried von Straßburg, 5. Aufl., Stuttgart 1981, S. 26ff.

28) Ebd., S. 4ff.

29) Hugo Kuhn : Die Gedichte Walthers von der Vogelweide, herausgegeben von K. Lachmann, 13., auf Grund der 10. von Carl von Kraus bearb. Ausgabe, Berlin 1965.

30) Peter von Polenz : a.a.O., S. 57. Fritz Tschirch : a.a.O., S. 88.

31) Joachim Bumke : Wolfram von Eschenbach, Stuttgart 1964, S. 13.

32) Ebd.

33) Wolfram von Eschenbach : Parzival. 7. Ausg. von K. Lachmann, besorgt von E. Hartl, Berlin 1952.

34) Wolfram von Eschenbach : Willehalm, Text der 6. Ausg. von K. Lachmann, Übersetzung u. Anmerkungen von Dieter Kartschoke, Berlin 1968.

35) R. E. Keller : Die deutsche Sprache und ihre historische Entwicklung, bearbeitet u. übertragen aus dem Englischen von Karl-Heinz Mulagk, Hamburg 1986, S. 255ff.

36) Wolframs v. E. Parzival und Titurel. Hrsg. von K. Bartsch, 4. Aufl. bearbeitet von Marta Marti, 1. Teil, Leipzig 1935, S. 9.

37) Fritz Tschirch : a. a. O. Joachim Bumke : a. a. O., S. 1ff.

38) R. E. Keller : a. a. O., S. 251ff.

39) Vgl. Adolf Bach : a. a. O.

40) R. E. Keller : a. a. O.

41) Paul, Moser, Schröbler : a. a. O.

42) Hugo Moser : a. a. O.

43) Fritz Tschirch : a. a. O., S. 87.

44) N. R. Wolf : a. a. O., S. 179.